

に向き合うことで、命の尊さとそれを守ることの難しさを痛感した時代であった。医療の充実を願うことは病気を医者まかせにすることではない。病気も生も死も自分のこととして立ち向かった時代から学ぶものは多いのではないだろうか。

本書の内容と構成は、第1章家で病気を治した時代—都市と農村にみる家庭看護、都市にみる家庭看護の最盛期、農村に多い病気と治療、第2章変わり行くお産のかたち、出産—妊娠から産湯まで、助産師と消え行く自宅分娩、第3章恐れられた病気—結核と急性伝染病、「国民病」と呼ばれた結核、猛威をふるった急性伝染病、第4章家庭看護と人、派出看護婦と保健婦、按摩と鍼灸師、となっている。コラムには「家庭看護の七つ道具」「配置家庭薬と家庭常備薬」「生活の知恵として普及した民間療法」「町のお医者さん」「駒込病院雑詠」「町のハイカラだった医院建築」があげられ、小泉氏を含め11名で執筆されている。

専門職看護の立場で拝読させていただいて驚いたのは、注射を自宅で家族がしていた時代があったことである。これは第1章の都市の部にある『細雪』にみる家庭における病気への対処の小項目でとりあげられている。『細雪』は谷崎潤一郎の代表的な小説で、書かれている時代は昭和

11年から16年である。「ビタミンBの注射をするのが癖になってしまって、近頃では医者へ行くまでもなく、強力ベタキシンの注射薬を備えておいて、家族が互いに、何でも無いようなことにもすぐ注射し合った」というのである。強力ベタキシンは、バイエル社から売り出されていた合成結晶ビタミンB<sub>1</sub>の商標名で、1日に1, 2アンプルを皮下または筋肉内に注射することで脚気の治療に効果があった。注射をする場面もきわめて具体的に書かれている。かかりつけの医院で注射法の指導を受けているとは思われるが、戦前期に一般人が家庭で注射をしていたという事実を知ることができた。

家で病気を治していた時代、地域のなかで家族全員の病歴を知っているかかりつけの医者のおかげの下で、家族が力を合わせて病気を治していた時代から、医療を自分の問題として自分で引き受けるという主体性がみえてくる。そのなかで初めて良い医療とは何かがわかり、何をめざしていくのかがわかるのではないだろうか。

(平尾真智子)

〔農山漁村文化協会、〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1, TEL. 03 (3585) 1141, 2008年2月, 25×19cm, 174頁, 2,800円(税込)〕

岩間真知子 著

## 『茶の医薬史——中国と日本——』

茶は世界中で広く利用されており、一口に茶といっても加工・調製法によって様々である。加工の早い段階で熱を加えれば、日本茶のような緑茶になるが、発酵させれば烏龍茶や紅茶のようになる。また飲むときの調製法でも、湯を注いで抽出する場合もあれば、しばらく火をかけて煮出すこともある。あるいはバターなどの乳製品や香料などを加えることもあり、各地の文化に根付いている。他方、茶外の茶といわれるものもあり、茶とは全く異なる植物でありながら、同じように嗜好品とされたり、茶のように調製したりするものも

総じて茶と呼ぶ。これを考えると、茶を論考するには基原となる植物自体だけでなく、その加工・調製法、それを利用する地域の文化など様々な背景が関わってきて、本書が絞った中国と日本を中心とした医薬史というテーマでさえも、扱うべき資料は膨大であることは容易に理解されよう。そうした中で、本書は中国日本各々について、時代ごとに数々の文献を整理し、それらの多くについて影印を附している。本書について著者が冒頭で、貴重な資料を伝えることが使命、と語っておられるように、本書全体を通して著者の真摯な研

究姿勢がうかがえる。関連分野の資料にあたらうとする研究者にとって、本書は大変使いやすく有意義なものとなる。

本書の第一章は「茶の医薬史：中国編」として、年代ごとに中国の医薬書を整理している。隋代までの医薬書として『神農本草経集注』を中心に考察し、茶の効能についての記載が現伝する龍谷大学所蔵『本草集注』序録にあることを指摘した。現在見るのできる一般的な本草書では、茶の初出は唐代の『新修本草』となっているが、同時に、『神農本草経集注』をまとめた陶弘景の茶の記述に対して批判がある。著者の指摘は茶の初出が『神農本草経集注』に遡ることを示唆したものである。唐代の医薬書としては、『千金方』や『外台秘要方』などの医方書からも、茶を構成生薬としている処方整理している。『新修本草』の項目では、古写本の採集時期についての記載が、現行本と異なることを指摘している。宋代の医薬書としては、『太平聖恵方』、『和剂局方』等の医方書に加え、『開宝重定本草』、『図経本草』、『本草衍義』、『紹興校定經史証類備急本草』など、重要な本草書について整理している。続いて明代、清代と主要な医薬書を取り上げている。

第二章では「茶の医薬史：日本編」として、我が国における医薬史について述べている。中国からの本草書の導入にはじまり、養生論、博物学の中で、我が国においてどのように展開したかが詳細に検討されている。また、江戸時代後期の蘭学の影響など、広範にわたって考察されている。

第三章は論考編として、これまで著者が発表された論文を集めて構成されている。古本草の検討、固形茶、蠟茶について、養生論との関わりなどについて論考されている。その中から著者の見解の一部を取り上げると、『本草集注』に記された茶の効能が、『葛氏方』に由来することを『医心方』の引用文の中から見出している。また、陶弘景の説を支持し、『神農本草経』における「苦菜」は、茶をあらわしていると推定している。

第四章は資料編として、中国、日本の文献を年代別に整理している。文献ごとに、簡潔な書誌に続いて原文あるいは影印、訳、注といった構成となっていて利用しやすい。一章、二章においてもそうであったように、資料を年代別に並べて考証することで、茶の歴史の変遷を追うというのが著者の意図といえるであろう。

本書は様々な視点から茶について考察しているが、注目される点は『神農本草経』の「苦菜」を茶としていることである。茶の起源については著者が本書であげたもの以外に、その他の照葉樹や、タンニンを含んだ異なる科の植物を利用していたとする説が存在する。「苦菜」についても今後も議論されるべきで、著者の説もその中で考慮される価値を十分に備えている。本草書の基原植物については、茶に限らず様々な生薬で問題となっている。薬効についての議論が、基原となる植物をはっきりと認識し特定した上でなされていたかどうかは、とても重要で難しい問題である。また、茶ほど嗜好品でありながら薬効が研究されているものはないであろう。著者は冒頭で「茶は薬として始まった」という岡倉天心の『茶の本』を引用しているが、古代において薬と食物を明確に分けるのは難しい。本草書をみると、米や麦といった穀物でさえ薬効が述べられている。茶は、薬物としての効果や、嗜好品としての利用価値などについて様々な分野で研究されてきており、本草書や医書は時代時代でそれらの成果を貪欲に吸収していった。それに対して、著者は医薬史を遡って茶についての記述を整理し、丁寧に紐解いていった。本書における著者の綿密な研究自体が、医薬史にわたる茶の足跡をあらわしているといえよう。

(鈴木 達彦)

[思文閣出版、〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-7、TEL. 075 (751) 1781、2009年4月、A5判、524頁+口絵2頁、9,000円+税]